氏　　名　三田（川端）　牧（みた かわばた まき）
学位（専攻分野）　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人博第309号
学位授与の日付　平成18年1月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目　糸満における海と魚の民族誌
——ウミンチューとアンマーの自然を読む知識——

論文調査委員　（主査）教授 福井勝義　教授 田中雅一　教授 菅原和孝

論文内容の要旨

本論文は，沖縄を代表する漁師町糸満における通算約1年6ヶ月（1996年2月～2004年5月）のフィールドワークにもとづき，海と糸満の人びとの関係性とその変容を実証的に分析した文化人類学的研究である。

糸満では男性がとった魚を女性が販売してきた。漁撈には，魚の行動や海底の地形，地質，風，潮などを判断する「海を読む知識」が必要とされる。また，魚販売には魚の鮮度や太り具合，肉質，有毒性，薬効など魚の属性を判断する「魚を読む知識」が必要である。本研究では，漁師（ウミンチュー）の「海を読む知識」と魚売りの女性（アンマー）の「魚を読む知識」をもとに，糸満の人びとと海との関係性，及びその変容を浮き彫りにする。

序章では，糸満漁民研究と沖縄の漁撈に関する生態人類学的研究を概観し，次の問題点を指摘している。(1)これまでの糸満漁民研究では，戦前の県外や海外への漁業進出と独自の経済システムに関心が向けられ，漁業の生態学的側面はほとんど論じられてこなかったこと。(2)これまでの沖縄の漁撈研究では，「海を読む知識」が静的にとらえられてきたこと。また，それらの知識が伝統漁法の研究においてのみ議論され，知識と近代技術が対立的にとらえられてきたこと。(3)これまでの研究では，アンマーの魚をめぐる知識や価値観がほとんど研究されてこなかったこと。

これらの問題をふまえ，ウミンチューとアンマーの海と魚を読む知識に着目して，糸満社会の民族誌を記述する意義を述べ，漁撈技術の進歩が知識に及ぼす影響を実証的に検討する必要性を指摘している。

Ⅰ章では，調査地糸満の生態学的・社会的概略を提示するとともに，主に明治期から調査時にかけての糸満漁業と魚販売の歴史をまとめている。とくに，男性による漁撈活動と女性による魚販売が対となり，漁撈社会糸満の発展を支えてきたことを明らかにする。

Ⅱ章では，アンマーの魚販売と「魚を読む知識」をとりあげている。まず，魚を吟味していくうえで，アンマーが魚の体表の色や眼球の大きさ，尾の長さなど特定の部位に着目し，魚の属性を読んでいることを分析する。次に，魚販売における客とのやりとりを分析し，アンマーが魚の属性について語ることで，魚は糸満の魚食文化によって価値付けられた「糸満の魚」になると論じている。さらに，魚流通が広域化していく今日，アンマーの販売する魚の種類とウミンチューがとる魚の種類が乖離していく，という現象を指摘する。

Ⅲ章では，網漁師による漁場開拓の事例から，ウミンチューがいかに環境を読み，網を張るのにふさわしい場所を見出しているかを分析している。まず，1977年と1997年の糸満のイノー（礁池）の空中写真に漁場を位置づけ，埋め立てにともなう漁場の変遷を示す。さらに，ひとつひとつの漁場に関するウミンチューの語りから，ウミンチューが海を読み，環境の「意味」ある要素，たとえば魚の餌となる藻場や魚の通り道になるサンゴの隙間などを有機的に組み合わせることにより，新しい漁場を作り出していることを明らかにする。

Ⅳ章では，48人のウミンチューの「天気を読む知識」をとりあげ，それぞれの漁経験との関連において分析している。その結果，「天気を読む知識」には，多くのウミンチューに共有される知識があると同時に，各々のウミンチューの経験を反

映した独自な知識も含まれていることを指摘する。一方で，漁撈技術や天気予報の進歩にともない，ウミンチューが天気を読む必要性は低下し，経験の浅い漁師ほど「天気を読む知識」を育んでいないことが具体的に示される。

Ⅴ章では，底延縄（そこはえなわ）漁師が「海を読む知識」を構築していく過程を分析している。そこで，魚群探知機が示す海底地形や，天気予報の解説などが，漁師の経験から得た知識に照らし合わされ，新たな「海を読む知識」が構築されていることを明らかにする。その一方で，技術の進歩によって，海を読むことにほとんど関心を示さない人でも魚がとれるようになった。その結果，海の資源をめぐり，ウミンチューと近代技術に依存した遊漁者が競合するようになったことを指摘する。

終章では，これらの検討をふまえ，以下の事柄を考察している。

(1)ウミンチューは，「海を読む知識」を深めていくことで，より豊かな漁獲を求めてきた。アンマーは，買い手を引きつけて魚を売るために魚の属性を読み，魚の多様な価値を語り出してきた。このようなウミンチューとアンマーの海や魚を読む行為によって，海と深く結びついた糸満社会が構築されてきた。

(2)漁撈技術や天気予報の進歩は，海に対する二つの異なる姿勢を生みだした。一つは技術から得た知見を自己の経験に照らし合わせ，より深く海を読もうとする姿勢，もう一つは技術によって海を読むことを簡略化し，近代技術に依存していく姿勢である。

(3)魚流通が広域化していくことで，糸満の魚食文化によって価値付けられた「糸満の魚」が重視されなくなってきている。

(4)90年代後半の糸満社会では，しだいに海や魚が読まれなくなってきていた。このことは，海の異常に人びとが無関心になっていく可能性を示唆している。

論文審査の結果の要旨

本論文の貢献は，沖縄県糸満におけるウミンチュー（漁師）とアンマー（魚売りの女性）の「海を読む知識」と「魚を読む知識」を具体的な観察や聞き込みデータにもとづいて，海と人の関わり及びその変容を描き出したことにある。糸満は，独自性に富んだ漁撈社会として，これまでにもしばしば研究の対象とされてきた。しかしそれらの研究では，人びとの自然認識はほとんどとりあげられてこなかった。本論文の評価される点を，以下の二つにしぼって指摘する。

第一に，申請者は，海と魚を「読む」ことがどういうことなのか，ウミンチューの漁場開拓とアンマーの魚販売の分析から具体的に記述している。まず「海を読む知識」に関しては，網漁師による漁場開拓の事例をとりあげ，大規模な埋め立て工事によって海洋環境が急激に変化する中で，ウミンチューが環境の利用可能性を読み，その要素を有機的に組み合わせることで新しい漁場を開拓してきたことを明らかにしている。

「魚を読む知識」に関しては，セリにおける魚の吟味と魚販売時のやりとりを分析し，アンマーがさまざまな角度から魚の属性を読みとり，その属性について買い手に語ることによって魚が価値付けられていくと論じている。

これまでの沖縄の漁撈研究では，「海を読む知識」は，海洋環境へ適応していく手段として静的な記述がなされるにとどまっていた。本研究では，漁師の臨機応変な判断を支える「海を読む」行為に着目し，個々の漁場についてのウミンチューの語りを分析した。これまでの研究では，魚をとってから売るまでの一連の流れにおいて，人と海の関わりがほとんどとらえられてこなかった。本論文は，アンマーの魚認識にまで踏み込んでおり，たいへん興味深い。

第二に，本論文では，さまざまな漁経験を有するウミンチューたちの知識を比較検討するとともに，ウミンチューが近代技術を取り込む過程で構築していく新たな「海を読む知識」を分析することによって，漁撈技術や天気予報の進歩による海と人との関係性の変化を浮き彫りにしている。

申請者は，底延縄（そこはえなわ）漁師による「海を読む知識」に着目し，新しい技術や天気予報がそれらの知識の構築過程にどのように影響をもたらしてきたかを検討している。たとえば，魚群探知機が提示する海底地形が，経験的に把握してきた海底地形像と照らし合わされ，ウミンチューが自然現象を再解釈していく過程で，新たな「海を読む知識」が構築されていくことが具体的に示されているのである。その一方で，近代技術の進歩によって海を読むことができなくても漁ができるようになり，遊漁者をも含んだ資源獲得競争が深刻になっていることが指摘されている。これらの検討から，海と人との関係性を変容させるのは，近代技術の導入そのものではなく，技術を用いて海をより深く読むか，技術がもたらす情報に

依存するあまり結果的に海を読むことを簡略化してしまうか，という海に対する姿勢の分化ではないか，と指摘している。

これまでの沖縄における漁撈研究では，「海を読む知識」は伝統漁法の研究においてのみ議論され，近代技術と知識は対立的にとらえられる傾向にあった。本研究では，近代技術は知識の必要性を低下させることもあるが，「海を読む知識」をより深化させる場合もある，という新しい視点を提起した。

本論文の主題は，漁撈技術の著しい進歩や開発による大規模な海の埋め立て，セリの導入による魚流通の広域化など，戦後の沖縄が経験した現実とかかわっている。それらの経験を通してもたらされた海と人との関わりの変容を，ウミンチューとアンマーの海や魚を読む知識を軸に，具体的かつ鮮明に描き出すことで，本論文は優れた民族誌となっている。また，聞き取り調査と観察から，海や魚を読むことに関するおびただしいデータを収集し，豊かな一次資料を提示している。これらの資料が，将来における沖縄の環境問題を考えるうえで，きわめて有益なものであることはまちがいない。

本論文は，以上述べてきたように通算約１年６ヶ月におよぶ現地調査において参与観察と聞き取りから得た具体的なデータを丹念に分析し，自然環境と人間の関係性という基本的かつ現代的な課題に新しい視点を提起しており，本研究科文化・地域環境学専攻文化人類学講座にふさわしい内容を備えた研究成果として高く評価される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成17年６月２日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。